
勇者のための四重唱【蒼】第三曲「せかんど らいふ」

朝来みきひさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者のための四重唱【蒼】第三曲「せかんどらいふ」

【Nコード】

N4015W

【作者名】

朝来みきひさ

【あらすじ】

有能な領主がいた。若くして領主となつてから40年、公平な統治を行い領民に慕われ続けた領主がいた。還暦を迎えた秋分の日、彼は、新たな人生を歩み始める。長年彼を仕えた同年の執事と共に彼が向かった先は、ならず者の集まり、冒険者のギルドだった。

【この作品は、拙サイト「世暁（<http://www.yoake.org/>）で公開している作品です】

第一話 ばーすでい ぶれぜんと（前書き）

【この作品は、拙サイト「世暁（<http://www.yoak.e.org/>）で公開している作品です】

第一話 ばーすでい ぶれぜんと

本当に、行くんですか？

「何を今更。10年前から計画していたことだぞ」

……途中で飽きてくれればと思ったんですけどねえ。

「本当に、そう思っていたのか？」

いいえ。

あるわけがないと思っておりましたよ、はい。

だって貴方は、その粘り強さに定評のあるお方。裏を返せば『しつつこい』『頑固な』お方。ええ、諦めるとも、飽きるとも、思っちゃいませんでしたよ。淡い夢を見ていただけです。人の夢は儂いんです。

「思いつきり言うな……」

言いますよ。それがアタクシですからね。

それに、これからアタクシ達主従の二人旅。言いたいことを我慢していたら、胃に穴が開きますって。

「何！？ それは困る。我慢せんでもよいぞ。言いたいだけ、儂に言え！」

ええ。言いますとも。

……聞いてくれるとは思っちゃいませんがね。

一年は二つに分けて名付けられていた。年の始まり立春から折り返しの立秋までを光の期、立秋から次の立春までを闇の期と。光の期始まりの立春は新年ということもあり、盛大に祝われるが、闇の期開始の立秋は、質素なものだった。光に属する賑やかさと、闇に属する穏やかさを良く表していると言ってもいいだろう。

そんな期の変わり目でもある立秋に、生まれた男がいる。海と山

によって外界から閉ざされたアークス大陸。その北部カルーラ聖王国の山間にある、エクウスと言う小さな領土の主だ。

60年前の立秋に生まれた男は、エクウスを治めるために、親に賤けられ、弱冠二十歳で親から領土と爵位を譲り受けた。それから40年。穏やかで公平な治世により、領民に慕われ続けていた。ところで。

人生の一回りを60年とする習慣がある。一回りを向かえる年を還暦と言い、特に盛大に祝われた。この習慣では、60歳からは二回り目の人生と言われる。これを機に稼業を息子へ譲り、第二の人生を謳歌する者も多い。

立秋生まれのこの男も、例に漏れなかった。

今年の立秋は碧月と紅月の満月が大地を照らす明るい夜だった。

眩しすぎる月に照らされて、二つの影が、山を背にする小さな城から出て行く。

その光景を、真つ暗な城の中で見守る者達がいた。明日付でエクウス領主の座と、男爵位を得る男と、その妻。そして、彼らの子供にしては少々年嵩の少年だ。

「……父を」

青みの強い紫の髪を持った新領主は、窓越しに去り行く人影を見ながら、口を開いた。

「父を、お願いします」

去り行く影は、彼の父であり、この地を40年間治めていたヒサムル男爵家の主ギルベルト。そして、その片腕である執事セバスチヤンだった。

「領主と爵位は、いつかは継ぐべきものだったので、異存はありません」

小柄な少年は、視線を落とす。釣られて男も視線を落とした。視線の先にある領主の机には、息子宛の手紙と、領地を治める為の聖

王からの任命状が置いてあった。

これは、本来、明日の朝、見つける筈のものだった。人知れず、代変わりの事務処理を行い、文句を言わせないように、夜のうちに姿を消す。それが、ギルベルトの計画だった。それはうまくいく筈だった。息子たちも、城に仕える者も、誰も彼の計画に気付かなかったのだから。

事前にそれを知ることが出来たのは、数日前、この少年が彼の元に訪れたからだ。

「ダーヴィット殿は、おられますか？」

春の空を想像する淡い色の髪を持った少年とも少女とも取れる訪問者を出迎えたのは、執事長のセバスチャンだ。不審な来訪者の対応は、彼か彼の息子が行うのが、常だった。

「王の命で参りました」

少年と言える年頃の男がそう訪ねてきて、そうですが、それは御苦勞様ですと、信じるほどセバスチャンはおめでたくない。彼は白髪交じりの太い茶色の眉を寄せた。警戒心を強めた執事に、訪問者は書状を入れる筒を掲げて見せる。

筒に、剣に絡み付く龍の紋章が彫られているのが、見えた。

「これはっ」

偽物も多々あるが、それを見分けることができなくては、当主の片腕と名乗る価値もない。間違いない。カルーラの紋章だ。

「王の命で参りました」

少年は、同じ言葉を繰り返す。今度は神妙な表情で、セバスチャンは一礼した。

「……お待ちしております。ダーヴィット様ですね」

執事長は、近くにいた使用人へ、当家の若君を呼ぶよう命じ、自らは来訪者を応接室へと導いた。

「アドルです」

応接室に現れたダーヴィットに、少年はそう名乗った。ダーヴィットだ、と若と言うには少々臺が立った、三十半ばの男は名乗る。「王の命で参りました」

三度目。この言葉しか知らないのではないかと疑いたくなる。が、最初に同じ言葉を二度言わせたのはセバスチャンだし、ダーヴィットに対しては初めてだ。

ダーヴィットは、アドルの差し出した書状を受け取る。鑑封された筒を開け、中身を広げた。
かこん。

そんな擬声語が似合うくらい、見事にダーヴィットが口を開けた。その表情を言葉にするなら、あつけにとられた……いや、文字どおり、開いた口が塞がらない。

「い……いつの間に」

強引に衝撃から立ち直ったダーヴィットは、父親譲りの青い瞳を執事長へと向けた。

「セバス、知っているな？」

「主に止められております」

セバスチャンは、言外に肯定する。肯定と共に、これ以上彼が語れないということを理解した若君は、大きく息を吐いた。

「聖王からのご命令、確かに受け取りました。お役目、御苦労様です」

「いえ」

アドルはにこやかに頷く。

「この話、ご存じではなかったようですね」

「はずかしながら」

「では、これはご存じですか？」

アドルは、可愛い顔で、にこりとほほ笑む。やはり、とセバスチャンは心の中で呟いた。主の書状に添付した自分の書も、聖王は読んで下さったのだ。

「貴方に全てを押し付けて、ご当主は旅に出るつもりですよ」

「え？」

「冒険者に、なるそうです」

「……………はい？」

再びダーヴィットの口が、かくんと開いた。

顎が外れるのではないかと、セバスチャンは少々心配になった。

全てを知り悩んだ拳句、よりによって聖王へ相談してしまった執事長と、それを受けて聖王から派遣された冒険者の少年から、領主の息子は、父親の企みを聞いた。

絶対あの方は諦めませんよ、と言うセバスチャンは正しい。さて、どうすればいいのかと思った時に、手をあげたのはアドルと名乗った少年だった。

「私達を雇ってください」

「？」

「下手に止めて、裏をかがれるよりは、素直に出して差し上げれば良い。最初くらいでしたら、サポートしますよ」

当然、依頼料は頂きますが。とちゃっかり言うところが冒険者らしい。だが、不思議と嫌悪感は抱かなかった。

「……………そうだな。適当に冒険を演出して、満足して帰ってきてもらうか」

「と、いいますと？」

セバスチャンは真面目で優秀な執事だが、少々頭が固い。

「父のこの計画を……………還暦のお祝いということにしよう」

「私達へ冒険の共ではなく、冒険の演出を依頼される、と？」

反対に、年若くして冒険者をやっているアドルは、頭が回る様だ。ダーヴィットは、そうだ、と頷いた。

「父の夢を、安全に叶えてほしい」

ダーヴィットは、初めて会った時に言った言葉を、繰り返した。
「任せて下さい」

深い色の瞳には、自信が感じられる。実際、彼らが計画した冒険譚は、見事なものだった。物語を作るのが好きな仲間が居ると、彼は言っていたが、その人のシナリオだろうか。

「ただし、最初に言った通り、私達は一度だけしか、協力できません」

他にも王の命を受けているらしい冒険者は、念を押す。十分だ、とヒサムル家の嫡男は答えた。

「それでも、十分満足していただけるだろう」

「……だと、良いですけど」

「まあ、そこは、そこだ」

父をよく知るダーヴィットは、苦笑を浮かべた。

年を取ると、朝早くに目覚めてしまうから、不思議だ。

セバスチャンも、彼の主も、息子くらいの年齢の時は、二度寝が大好きだった。なのに、還暦をむかえた今、目は太陽と共に覚め、二度寝をすることができない。不思議なものだ。

二人は、この老人の習慣を利用して、夜明け前に城を抜け出した。夜遅くまで起きている者が布団の中に潜り、朝早くに起きる者がまだ動き出さない時間帯だ。

うつすらと白み始めた空を見ながら、セバスチャンは主を追う。朝市の準備も始まらない街道を歩くギルベルトは、どこへ向かうつもりだろう。

一応、アドルに導けと言われている行き先はあるのだが、セバスチャンは、主をそれとなくそこへ導ける自信がなかった。彼は、彼の思う通りに生きる。流されながらも己を保つ従者と違い、自己の

主張を通すことこそが己を表現する手段なのだ。だからこそ、人を導き、治める領主となり得る。

「ギル様」

セバスチャンは、幼い頃からの呼び名で主を呼んだ。

「なんだ、セバス？」

「どこへ向かうつもりで？」

「冒険座」

冒険座とは、魔物退治や雑事荒事を請け負う、ならず者一歩手前の何でも屋、冒険者の集まる場所だ。ギルドとも呼ばれるここに、冒険者として登録することで、どんな者も身分を保証される。あてのない旅をするには、必要なところだ。

「ばれますよ。ギル様は市井に顔を出し過ぎています」

「馬鹿か、おまえは」

ギルベルトは足を止めて振り返った。言葉どおり、呆れた顔をしている。

「領内は、さつさと出るに決まっておろう」

「あ、そうですか。そうですね」

セバスチャンは納得して、何度もうなずいた。この道は、町外れの冒険座へ行くためではなくて、街から出るために通っていたのだ。ギルベルトは民に顔売った。それは統治するのに必要だと思ったからで、決して間違った手段ではない。市井に頻繁に顔を出す領主は、民に慕われ、領主は民の笑顔を見ることが癒される。

この領主と領民は、そういう関係を築いていた。

しかし、顔を知られるということは、お忍びでの行動が全く出来ないと言うことだ。ギルドも例外ではないところが、この街の特徴だろう。町外れにある冒険座に顔を出したりしたら、その日のうちに、ギルベルトの所在がばれてしまう。登録を願い出れば、即座に城へ連絡が行くだろう。そっと城を抜け出し、息子に内緒で冒険者になろうと考えているギルベルトにとって、それは望むものではない。

「では、どこへ向かうおつもりで？」

「ボーク」

「へっ？」

「なんだ、不満か？」

「いえいえいえいえ！ 何の問題もありません」

むしろ好都合ですとは言わない。驚いたのだ。導け、とアドルに言われた場所に、ギルベルトが自発的に向かうと言ったことに。

「エクウス以外に、冒険座がある場所と言えば、ボークだろう」

……あ。

「そうでした」

セバスチャンは頭を下げる。

この辺りは、山にへばり付くようにして田畑を耕す農村が多い。

そんな中、数少ない商業都市は、領主の城があるエクウスと、やはり隣の領主が住む、ボークくらいしかなかった。導くも何も、行く先の選択肢自身がひどく限定されていた。

変に気負っていたらしい。

「行くぞ。昼頃には着くはずだ」

二つの街は、川と、その隣を走る整備された道で繋がっている。上流がエクウス。下流にボーク。馬車も走れる広さの道は、当代の両領主が共同出資で魔法使いに張らせた、魔物避けの呪があるため、魔物も出てこない安全な道だ。

「この日のために、ボーク領主をけしかけて、結界を張ったんだ」

「……冗談でしょう？」

二つの街を結ぶ道を整備したという偉業を残した領主の言葉に、セバスチャンは思わず聞き返す。

「儂が、冗談を言うとしても」

「言いますね。冗談のような本気もあるから、たちが悪い」

「……おまえの反応は、おもしろくないな」

冗談だったらしい。

セバスチャンは、ちょっとほっとした。

予想どおり、呪　この場合、祝と呼ぶのだろうか　によつて守られている二つの町を結ぶ道は、安全に通ることができた。

エクウスを出た時に誰もいなかった道は、日が昇ると途端に人で溢れた。道沿いでは朝市が開かれる。朝市目的でやってくる人と、別の目的で先へ進む人で、道が混雑する。

賑やかになった街道を、満面の笑みで、晴れて旧領主となった男は抜ける。秋と言うにはまだ高すぎる太陽が、空気と大地を熱する頃、二人はボークへと辿り着いた。

街と呼ばれる場所は、壁で囲まれている。理由は二つ。魔物の侵入を防ぐためと、人の出入りを把握するためだ。ただし、後者はほぼ形骸化している。街の出入りにそれと言った手続きは必要ない。開けられた門には、数人の兵士が常駐しているが、彼らは出入りの人数を数えているだけである。彼らの主な仕事は、有事の際に素早く門を閉める。この一点にある。

ギルベルトは堂々と門を入り、すぐにある店へと入って行った。ギルドの位置は、大体決まっている。門の一番近くにある、入り口が閑散とした店だ。

扉を押し開けると、カランカランと音がした。店内は、意外に明るい。天井の高い食堂が、最初に目に入った。昼時だからか、テーブルはそこそこ埋まっていた。大量の料理をかき込んでいる者、薄汚れた格好で昼間から酒をあおっている者、冷めたお茶を脇に頭を寄せてこそそと話をしている者など、様々だ。

奥まったところに、カウンターがある。その右手にある階段が、恐らく宿泊施設に繋がるのだろう。

「いらっしやい」

カウンターの向こう側に座っていた女性が、顔を上げて二人を迎える。赤毛の大柄な女性だ。まだ若い。

「……え？」

ギルベルトが、カウンターにいる女性をぽかんと見つめた。

「シリイちゃん？」

「彼女をご存じなのですか？」

セバスチャンは、驚きながら主を見上げた。隣町の冒険者を知っている事にも驚いたが、それ以上に、少女と言うには少々臺の立った女性を「ちゃん」付けで呼んだ事に驚いたのだ。

「セバス、知らんのか!？」

しかし、ギルベルトはセバスチャンの問いに、彼以上に驚いたらしい。思わず上げた大声に、食堂にいた冒険者達が、一斉に顔を上げる。そして、彼らの姿を見て、ああ、と妙に納得した面持ちで、自らの作業に戻った。

「まあ、そんなところに立っていないで、入ったらどうだい？」

「は、はいっ」

いつの間にかカウンターから出てきた、シリイと呼ばれた少女が、ぽんと軽くギルベルトの肩を叩く。それだけで彼は直立不動になった。セバスチャンは、驚きを通り越して呆れ返る。なんだこれは。まだ年が一桁だったころの、初恋の時と同じ反応だ。

節々が凍りついてしまったのではないのかと言うような、ぎこちない動作で、ギルベルトは、シリイに付いて行く。促されて、ぎくしゃくとした動きでカウンターの椅子に、どうにか座った。セバスチャンは、主の斜め後ろに控えて、はらはらとする。背の高いカウンターに合わせた、高めの椅子から、主が無様に落ちてしまうのではないかと思ったのだ。

「んで、爺さんたち、何のようだい？」

カウンターの向こう側に回ったシリイは、笑みを浮かべて首を傾げる。可愛らしさや艶っぽさよりも、清々しさを感じる笑みだ。

「シリイちゃんは、なぜ、こんな田舎町に？」

ギルベルトは、目の前の女性の問いを聞いていない。

だが、シリイは不快な顔をせずに、当然のように答えた。

「たまたま用事があってね。カルーラ自体には数年前からいるよ」

「なぬ！ そうだったのか？」

「内緒でね」

だから、とシリイは人差し指を口に当てる。色っぽい仕草な筈なのに、健康的な好感しか抱かせないのは、彼女の才能だろうか。

「アタシがここに居ることは、黙って居て暮れるとうれしいな」

「うむ。うむ。儂は口が堅いことで有名だ。そのセバスもなっ！」
「ふうん？」

シリイが青みの強い緑の瞳をセバスチャンに向けた。セバスチャンは、その通りだと何度も頷く。その仕草に、彼女はくすりと意味ありげに笑った。

「仲間と、冒険者をやっている。たまに、こうやってカウンターにも立つけどね。今は、ちょっとした依頼の待ち時間だから、店番をやったんだ」

「仲間がおるのか？」

「うん。青い悪戯っ子がね」

シリイの言葉を聞いて、セバスチャンははっと顔を上げた。真っ先に思い浮かんだのは、年若い使者。まさか、彼女も？

「年下なのか？」

「そうだね。アタシが最年長」

なら、仕方がないか。ギルベルトはなぜか一人で納得した。

「もしフリーなら、シリイちゃんを誘えると思ったのにな」

「誘うって……冒険者なのかい？」

緑の瞳を見開いて、シリイがカウンターから乗り出した。よくよく見れば、彼女の仕草は芝居っぽい。わざとらしい反応に、ばれるのではないかと少しはらはらした。

「冒険者志望だ」

「……ふうん」

シリイは、感心したようにギルベルトを見る。その視線が、傍らに控えていたセバスチャンへと向けられた。彼は頷いて見せるが、黙殺された 勘違いか？

一方ギルベルトは、シリイの反応に何か思うことがあると感じたらしく、太い眉を歪めた。

「こんな老人が冒険者志望なんて、おかしいか？」
「いいや」

シリイはあっさり否定してから、カウンターの下を覗いた。二人の視界から、彼女の姿が消える。

「それなりに心得もありそうだしね」

死角から、声と共に紙が飛んだ。ひらひらとカウンターに舞い降りた紙をギルベルトが手に取る。覗いて見れば、酒の領収書だった。さらに降って来た紙は、納品書。地図、白紙の依頼書、白紙の請求書……カウンターの下で、何か書類を探し始めたようだ。

「シリイっ！」

この、散らかされた書類をどうすべきかと悩み始めたころ、奥の事務室から、男が飛び出した。

「こんな散らかしてっ！ 何を探しているんだ？」

「冒険者登録書と、その他一式」

「……持つてくるから、これ以上触るな」

探しているところにはないから、と、男は頭を抱えた。

「教えた気がするんだが……僕の気のせい？」

「そうだったかね？」

シリイは悪びれずに、すくつと立ち上がった。男と視線が並ぶ。

彼女は女性にしては大柄だった。

「片付けは？」

「僕がやる。シリイの『片付け』は『纏めて脇に寄せる』の同義語だろう」

「失礼だね」

シリイは、そんなに憤慨した様子でもない声で、抗議する。

「捨てるという選択肢だってあるよ」

「……それは。」

「頼むから、そのままにしておいてくれ。僕がすぐに片付ける」

どうやら彼女は、事務をやるには少々大ざっぱな性格らしい。

間もなくして、男が書類をもって現れた。カウンターに散らばった書類を、ぐしゃりと纏めてカウンターの向こう側へ落とすのを、眉を顰めたまま無言で見守る。何を言ってもむだだと分かっている顔だ。

そこだけ片付いたカウンターに、事務の男は二組の書類を置いた。「書きたくないところは空欄で良い」

一枚目を指して、男は言う。その用紙を見て、ギルベルトは失笑した。

「いい加減なんだな」

そこにあるのは、名前、出身地、生年月日、性別、住所など、基本的なものばかりだった。書けない者の方が少ないだろう。

「この欄を埋めることが出来ない者も受け入れるのが、冒険座の良い所だ」

そうだった。

ここは『普通』ではない素性の者も受け入れ、独自のルールで厳しく律する組合なのだ。ギルドは魔物を倒す者達の集まりだけではなく、社会という輪から外れないための、最後の砦と言う役目もあるのだ。

「では、僕も書けるところだけ……おい、セバスもだぞ」

「あ、はいっ」

忘れていた。

慌てて机にある書類にかぶりついたセバスチャンへ、シリィが椅子を勧める。背の高い椅子は、小柄なセバスチャンにとって、座るのに苦勞する。よじ登るようにして座れば、当然足がぶらりと宙で遊んだ。地に足がつかないのは不安だ。セバスチャンは、落ちないようにと、椅子に深く座り直してから、カウンターにある紙に向かった。

「1枚目は、適当で良いよ。ただし、2枚目以降は、しっかり書い

ておくれ。面倒だろうけどな」

主に倣い、氏名は名前だけを、出身地はカルーラのエクウスとだけ書いた所で、シリイが、残りの書類を示した。

「これは……確かに面倒臭いな」

ギルベルトが、苦笑する。

そこには、いくつもの項目が一覧表となつて、並んでいた。それは主に技能を問うものだ。戦いに使う武器をひとつ取っても、これでもかと言つくらい並んでいる。魔法も、現在判明している系列がすべて網羅されているのではないかという勢いだ。

ギルベルトは迷わず得手に長剣を選ぶ。たしなみ程度に呪文も使えた。逆にセバスチャンは、何を選べば良いのかと迷う。家事や事務は得意だが、荒事は苦手なのである。呪文も才能に恵まれなかった。

全て『出来ない』でも、冒険者になれるのだろうか。不安に思いつながら、一覧を眺める。自分も冒険者にならなくては、主へ付いて行けないではないか。それは困る

と、深いため息をつきかけた時。

「……なんだこりゃ」

見つけた。

掃除・洗濯・料理・裁縫・草木の剪定・事務・会計・執事業務……項目に一貫性がないと思うのは、セバスチャンがこれらのプロだからだろうか。前の方にあった項目も、見る人が見れば、こんな感じなのかもしれない。あまり気にしないようにして、セバスチャンは『執事』として身につけたこれらの技術　と言える代物なのだろうか？　にチェックをつける。ところで『執事業務』とは、どこまでのことを指すのだ？

「執事の真似事が出来れば、いいんだよ」

耳を、低い女性の声がかくすぐった。驚いて見上げれば、にやりと笑ったシリイと目が合う。

「あーっ！」

ギルベルトが、手を止めて叫んだ。

「狡いぞ、セバスッ！」

「……いや、そう言われなくても」

勝手に話しかけてきたのはシリイの方だし。困って見上げれば、
当のシリイは平然として、再び彼の耳に口を近づけた。

「あーっ！ あーっ！！」

「そろそろ、始まる……来るよ」

ギルベルトが絶叫する中、シリイの小声がしっかりセバスチャン
の耳に届く。

「来る？」

意味を掴み損ねて首をかしげた時、バンッ！ と扉が勢いよく開
いた。

第二話 ふぁーすと みっしょん（前書き）

【この作品は、拙サイト「世暁」(<http://www.yoake.org/>)で公開している作品です】

第二話 ふぁーすと みっしょん

「いらっしゃ……」

「助けて下さいっ!」

シリイの声を遮って飛び込んできたのは、20代前半の若者だった。ふわりとした藤色の髪が乱れている。

「洞窟の妹が、魔物で。貢ぎ物が、生贄につ!」

「……とりあえず、お茶でもどうかい?」

慌て過ぎていて、単語が意味をつくっていない。まずは落ち着けと、お茶を出すシリイの対応は正しいだろう。しかも、青年をカウンターに座らせてから、すぐに持ってきた暖かなお茶の香りは、心を落ち着かせる効果があるハーブだ。

セバスチャンは『紅茶』『ハーブティ』『ワイン』の項目にチェックをつけながら、青年の様子を、主越しに伺った。彼は、ギルベルトの席をひとつ空けた隣に座っている。

煎れたついでに、と出された同じハーブティに舌鼓を打ちながら、ギルベルトは口を開いた。

「洞窟に住まう魔物が、貢ぎ物にと貴殿の妹を要求してきたのかね? 生け贄として」

「そうです」

「何で分かるんですか!?」

声を上げたのは、カウンターの向こう側でずっと書類を整理していた事務員だ。死角に入っていたので、すっかり忘れていたが、彼はまだ居たのだ。

「青年は、ちゃんとそう言っていたではないか。なあ、セバス?」

「そうですね」

セバスチャンは頷く。彼のこの読解力に驚くのも今更だ。

彼は、領主になってから40年、山ほどの直訴を聞いてきた。興奮で意味のある言葉を成していない者、涙で言葉が上手く出て来な

い者、貴族の前で緊張して言葉を忘れてしまった者などを、沢山相手にしてきたのだ。ちゃんと必要な単語を発する者ならば、その構成が多少おかしくとも意味を汲み取ることくらい、彼にとっては難しいことではない。

「深呼吸をして……うん、いい子だ」

ギルベルトは、そつと青年乗せに手を置いて、優しく語りかける。シリイのハーブティとギルベルトの声に安心した青年が、小さく取り乱しました、すみません、と言う。もう大丈夫そうだ。

「どうしたんだい」

カウンターの向こうで、ギルベルトが青年を落ち着かせるのを待っていたシリイが口を開く。

「僕は、レプスのニコラス。ニコラス・レヴィです」

「レプス村のレヴィと言えば、村長の息子さんか何かかい？」

「よく、知っていますね……」

ニコラスが驚いて赤毛の少女を見上げる。それも知らないで、受付なんて勤まる訳がない、と彼女は当然のように言った。

「村からの依頼かい？」

「場合によっては、レヴィ家個人の依頼になります」

「言つてご覧」

落ち着いたニコラスは、シリイの大雑把なすぎる促しに、しっかりと口調で語り始めた。

ボース領内には、同名の街のほかに、大小の村がある。レプス村は、その一つだ。ボースの街が背にする山の途中にある高原に、その村はあった。レプスは山を祀っている。高原を見下ろす休火山シイ山だ。

「レプスでは、毎年山へ収穫物を備えています。そうやって、山の神を鎮め、シイ山の怒りを抑えているのです」

シイ山は大きい。過去、何度も山は怒りを爆発させ、レプスはもちろん、そのさらに下にあるボースへも危害を与えていた。

山の怒りは、ボース領土全体の脅威。そのため、領主はレブスへ科す税を他の地域よりも軽くし、その分を山の神へ捧げるように指示した。凶作などで足りない時は、補助すらしてくれる。

「そうやって、記録では5代、山は穏やかなまま過ごしてきました」
一つの世代で20年と考えて、100年、彼らはうまくやっていたのだろう。

「だけど……」

「そうではなくなった？」

「はい」

ニコラスは頷く。

「巫女が、御山の声を聞きました。生贄を出せ、と。祭司の娘を差し出せ、と」

祭司は代々村長が勤める 逆だ。祭司の家系が、村長を務めているのだ。

「初めてです。巫女が御山の声を聞くのも。御山が人を贄として要求するのも」

「嫁が欲しいのでは？」

ギルベルトの問いに、セバスチャンもそうだ、と頷く。

神は、気に入った人を伴侶として求めることもある。人に近い神ほど、その傾向がある。彼らが祀るシイ山の神が、山にいた神なのか、人が成った神なのか、ギルベルトもセバスチャンも知らないが、それが、珍しいことではないことは知っている。

しかし、ニコラスは、それは違々と首を振った。

「シイ山の神は夫婦神だった筈です……」

「それが生贄とは、珍しい話だね」

シリイが、カウンターに肘をついて、首を傾げた。ニコラスは、そうなんです。と彼女に同意する。どういつことなのか分からない老人二人に、シリイが説明した。

「夫婦神は、荒れにくいんだ。夫神と妻神でうまくバランスを取っているからね。たまに、不仲な夫婦神という例外もいるけど……」

「シイ山の神は、仲睦まじいです。近隣では縁結び、家庭円満を願う神様と親しまれてもいます」

そもそも、と彼は顔を上げた。

「あの神は、荒れるシイ山を鎮める神なんです。供物は、山を鎮める力を強めてもらうためのもの。神自身は、おとなしかったはずなんです」

なのに……と、青年は顔を曇らせる。

「生贄を要求してきた。それは、過去の記録にもありません。父はショックで倒れてしまいました」

生贄を必要とするほど山が危険な状態なのか、自分の祈りが足りないが為に要求したのか、それとも他の何かか。神が生贄を要求してきたこと自体に、そして、それが最愛の娘だったことに、ショックを受けて、村長であるニコラスの父は倒れてしまった。

ニコラスは、村長の代わりに、また、妹のために、ここに来たのだ。

「妹を、助けてください」

「だけど……」

「よし、儂が引き受けた！」

シリイの声を遮って、ギルベルトが立ち上がる。

「本当ですかっ!？」

ニコラスも立ち上がった。彼はがっしりとギルベルトの手を握り、ありがとうございます。と叫ぶ。

「いや、待て。ちょっと待ってくださいって！」

手を取り合う二人に、セバスチャンは慌てた。

「相手、神様ですよ？ 初めての仕事にしては、ハードル高すぎません？」

「駄目ですか？」

しゅん、と肩を落とす。止めてくれ、こんな明らかな落胆するのはっ！

「いや。困っている人を助けずに、何が冒険者だ！」

案の定、ギルベルトは、躊躇なく、力いっぱいニコラスの不安を否定した。

いやな予感がした。

領主時代、必死になって抑えて来た悪癖が、再び姿を現している気がする……

「手立てはあるのかい？」

「直談判」

シリイの問いに対する答えが、早い。

「いつもなかったことがあると言うことは、それなりの理由があるはずだ」

「神と直談判する手段があるんだ？」

「努力と根性」

これまた、即答である。

セバスチャンは頭を抱えた。

この人、変わっていない。領主時代の40年間、一度も領民に対して言わなかったから、油断していた。単に、領民に強要しなかっただけだったのだ。

「努力と根性でどうにかなるものじゃないでしょう！」

出て来た声は、予想以上に悲痛な叫びとなった。

「巫女を通してしか接触出来ない神と、どうやってコミュニケーションを取るんです？ あなたは親子じゃないんですよ？」

「……いや、意外といけるかもしれません」

口を挟んだのは、書類の整理を終えた事務員だった。

「領主や神殿に頼まず、ここに来たのには理由があるのでしょうか？」
事務の男は視線をニコラスに向ける。ニコラスは、そうです、と頷いた。

「神殿に様子を見に行った者が、確認しています。二匹の魔物がいた、と」

ニコラスは沈痛な表情で瞳を閉じた。

「神は荒れ、魔物となりました」

神は色々な分野で分類できるが、分け方の一つに、和と荒というものがある。

世界の輪の中にあり、輪の中に居るモノへ恩恵を与える和神。そして、和の外にあり、和の中に居るモノへ災厄を与える荒神だ。しかし、それらは最初から決まって居るものではない。荒神は、きちんと祀れば和神となり恩恵を与える。和神は一つ転じれば荒神と化する。

荒れた神は、神自身の強さや性質にもよるが、魔物となり、具現化する事もある。こうなってしまったら、力で倒すしかない。力尽くで荒れ狂う力を殺ぎ、滅ぼしてしまうか、弱った御霊を再び祀り上げて鎮めるのだ。

では、魔物と化した神をだれが倒すかが、問題になる。そこで出てくるのが冒険者である。元が何でも『魔物』となれば、一番頼りになるのは冒険者、と言うのが一般人の常識だ。ニコラスがここに来たのは、当然の選択だった。

「依頼内容は、魔物の討伐。という事だね」

シリイのまとめ方に、ニコラスは思わず、といった風に、苦笑した。少し明るくなった表情に、彼が初めて笑ったのだ、とセバスチヤンは気付く。

「平たく言い過ぎると、そうです」

「その後は？」

「できれば鎮まってもらい、再び御山を鎮めていただきたいです」

「あいわかった」

ポンとギルベルトが手を叩いた。

「ギル様！？」

「何そんな表情をしておる、セバス。儂は言っただけだ、引き受けた、と」

「……途中で気が変われば、と思っただんですけどねえ」

「本当に、そう思っていたのか？」

「いいえ」

セバスチャンは、きっぱりと否定した。

「あるわけがないと思っておりましたよ、はい。だって貴方は、その粘り強さに定評のあるお方。裏を返せば『しつっこい』『頑固な』お方。ええ、そんなこと、思っちゃいませんでしたよ。淡い夢を見ていただけです。人の夢は儚いんです」

「セバスは、いやなのか？」

一気に言い放ったら、ギルベルトは太い眉を八の字にした。

「いいえ」

「……………」

ギルベルトが黙り込む。セバスチャンは、主を無視してカウンタ―へと視線を移した。

「アタクシ達に出来るんですか？」

「やってみるかい？」

シリイが、挑むような目で問い返す。

予想は確信に変わった。

彼女が来ると言った直後に、飛び込んできた依頼。ギルベルト依頼人との話に口を出すのを、止めない事務員。口を挟んで来ない周囲の冒険者。そして、新人で老人な冒険者には、手に負えなさそうな仕事を受けたいと言うギルベルトを、止めないシリイ。

「受けてもいいようですよ、ギル様」

「よしきた！」

ギルベルトは、嬉しそうにもう一度手を打った。やりがいのある大きな仕事が舞い込むと、まず喜ぶのが、この元領主である。

「なら、ニコラス殿は、すぐに帰って、祭りの準備をしていただきたい」

「え。一緒に行かないのですか？」

ニコラスは驚いてギルベルトを見上げる。

「少なくとも、体裁として『魔物を倒すもの』と『神を鎮めるもの』は分けておいた方がよからう。レブスの民がシイ山の神を害したとなれば、後がやりにくい」

「そうですか……」

「汚れ役は、冒険者の役目だ」

冒険者を使い、力づくで問題を解決した経験もある元領主は言う。

「お主らは、とにかく平穏を祈り、神を祭るんだ」

ニコラスは呆然と、ギルベルトを見る。

「……………ありがとうございます」

その表情を見て、セバスチャンは、ギルベルトの傍らで、うんうん、と頷いた。ニコラスの浮かべる表情を、セバスチャンは何度も見ている。直訴して来た領民の殆どは、彼の真摯な対応に、こんな表情を浮かべて頭を下げた。

そんな時、セバスチャンは主を誇らしく思う。

冒険者として外に出ても、そんな彼を見れたことが、セバスチャンは嬉しかった。

ギルベルトは依頼「妹を助けて！」を請けた！

「あの従者は気づいたかね？」

事務員の問いに、じゃないの？ とシリイは返す。

「もの言いたげな顔をしていたよ。まあ、あの主人の前で、下手なことを言えば、すぐにばれるだろうから、確認のしようもないけどね」

「全くそうだ」

笑って、事務員はティーカップに口づける。

「本当に、お茶をいれる事だけは上手いな」

「おいしいだろう？」

シリイはまんざらでもない表情で、何度も頷く。褒められて、嬉しくないものはいない。

「しかし、何であれから、あんなファンタジーな物語が作れるのかね？」

「それはアタシじゃないよ。フェイスに聞いておくれ」

「真相知れば、怒り出しそうだ」

村人も、老人も。

「文句はアドルに言えば良い」

しれっと責任を仲間へ転嫁して、シリイも自分のカップに口をつける。

彼女はカウンターのこちら側にいた。本来彼女が居るべき、正しい位置だ。

先程までここに座って居た初老の二人は、ここに宿を取って、街へと出ていた。流石に領主がこっそりと領内で準備をするには、限界があつたのだろう。資金だけは十二分に用意している二人は、ここで必要なものを買ひ込むつもりなのだ。

レヴィの倅は既に帰路へと着いている。彼の話は嘘ではないから、やるべきことが多いのだ。

「さて」

シリイはカップを置いて、立ち上がる。椅子の側に置いてあつた荷物と杖を、手に取った。

「アタシは次の持ち場へ行くよ。忙しい中、世話をかけたね」

「いやいや、楽しませてもらったよ」

お世辞か、本心からか。カウンターの本当の主は手と首をおおげさに振った。

「で、次の予定は？」

「アタシは、山に直行だね。道中は、エドがついている」

彼なら、潜むことが難しい広い街道でも、存在を悟られずに二人を守ることができる。それに、彼らの味方は自分たちだけではない。「そうか。暇があつたら、顛末を教えてくれ」

「皆で、歌いに来るよ」

彼 いや、彼だけではない。ポーカーフェイスで老人たちの様子を見ていた冒険者連中も加えた全員は、今回の仕事の協力者である。シリイ達には、彼らに顛末を報告する義務がある。

シリイの言葉に、男も、周りで楽しそうに見ていた冒険者も、期待に満ちた表情を浮かべた。彼らは、シリイが、最近急速に名をあげたパーティ『勇者のための四重唱』の一人だということを知っている。知っているからこそ、彼女達が紡ごうとする物語に、協力したのだ。

「愉快的な物語を、期待しているよ」

「愉快……ね」

それは期待してもいいかもねれ、とシリイはおかしそうに笑った。

年を取ると、太陽とともに起きるようになる。それがまた、楽しくなる。

ギルベルトとセバスチャンは、ギルドに泊まる冒険者の誰よりも早く起き出した。夜明けは遅くなっていると言っても、まだ、秋分前だ。日の出とともに起きても、街が目覚めるにはいくらか早い。

街が起き出す様子を、二人は散歩しながら眺め、ぽつりぽつりと集まりだしたギルドの食堂で朝食をとる。若者たちが眠い目を擦りながら出立の準備をしている姿を尻目に、二人は元気一杯、ギルドから出た。

「じいさん！」

出る時に、気安い声がかかる。セバスチャンは、それが自分たちを呼ぶ声だと、すぐには気付かなかった。

「あんただ、あんただよ、デコボココンビ」

驚いて振り返れば、大男が、にかつと笑って手を振った。見渡せば、その場にいる誰もが、彼らを見ている。

「頑張れよっ！」

「レプスの山は、老体に堪えるぞ」

「ほどほどになっ！」

「素晴らしい、セカンドライフを！」

冒険者達の馴れ馴れしすぎる言葉に、セバスチャンはきゅつと眉が寄った。領内では、領主に対してそのような言葉は許されない。彼は、領主に対して無礼な輩を、諫める立場にいた。

しかし

「声援、感謝する」

当のギルベルトは、明るい表情で、自分を見送る冒険者に手を振った。

そうだ。

ギルベルトは、男爵でも領主でもない。年老いた新米冒険者なのだ。そして、彼の主は、このような気安い関係を、第二の人生では求めていた。

馴れなくては

先を行く主の背を見て、セバスチャンは拳を握る。生まれてから60年かけて染み込ませた、ギルベルトに対する価値を、変えなくてはならない。領主ではない。貴族ではない。ただの人である、と。それは彼にとって、途方もなく難しいことのように思えた。

ボースからレプスへは、北の道を進む。それは、曲がりながら、ゆっくりと上る山道だ。エクウスからボースまでのような、広くて安全な街道ではない。山へ入れば入るほど、緑は深く、道は狭く、暗くなる。魔物が出ることも、珍しくなかった。

普通の人は、冒険者が護衛する定期馬車を利用する。金のある者なら、個人的に冒険者を護衛に雇う。これが、魔除の結界が張られていない道の、一般的な移動方法だ。そんな中、ぼつりぼつりと歩いているのは、馬車を利用する金を持たない者や、根性のある者。

そして、冒険者くらいだ。

当然、ギルベルトとセバスチャンも、徒歩である。この道は、レブスとシイ山にしか続かないから、歩く人もほとんど見当たらない。通り過ぎた幌の無い定期馬車も、乗客がまばらだった。

ギルベルトは、ボースで買った大剣と楯を背に、揚々と歩く。その後ろを、セバスチャンは追った。彼は、腰に剣をはき、大きな楯を左に持つ。背中には、旅に必要な道具が、二人分詰まっていた。主に大荷物を持たせる訳にいかない。それに、セバスチャンが荷物を持ち、ギルベルトが身軽でいた方が、魔物に対処し易い。カルーラ聖王国の貴族は、一般的に、「嗜み」の域を越えるほどに剣が使える。ギルベルトも例外ではない。

ぴく。

前を歩くギルベルトの様子が変わった。生まれてから、ずっと彼の後ろを歩いてきたセバスチャンだから、分かる変化だ。

彼は前方にある、セバスチャンが気付かない何かに、気付いたのだ。

「どうしました」

「殺気」

臨戦態勢に入ると、主は言葉数が少なくなる。

手が、背中にある大剣の柄を握っていた。既に楯は手の中に有る。

「魔物ですか？」

「助ける」

言うと同時に、彼は駆け出した。

「ああっ！ ギル様ーっ」

セバスチャンは背負った荷物を揺らしながら、慌てて後を追った。

エドは木の上にいた。

彼の目の前で、エドと同じくらいの年頃の少年達が、大騒ぎしながら魔物とどつきあっている。

「……………」

どつきあい、という言葉が似合う稚拙な戦闘は、微笑ましさすら感じる。普通の新米冒険者は、こんなものなんだろうな、と、のんびり彼は見ていた。彼は志して冒険者になつたわけではないし、仲間とも『新米』の域を脱してから出会っている。なので、こういう稚拙な冒険者は、新鮮だ。

エドは、この戦闘に手を出す必要はないと判断していた。少なくとも、相手の魔物も『どつきあい』に相応しい戦闘力だ。万が一を考えて、手には得意の弓矢を持っているが、構えていない。

あまりに拙い戦いに、やきもきしだしたころ、エドは別の気配を感じた。近づく気配に反応して、エドの視線が動く。視線の先には、目の前の冒険者よりも、はるかに様になる格好で剣を構えた長身の老人が、走って来ていた。その後ろから、アドル並に小さい小太りの男も。

「やっと来た……………」

主役の登場に、エドはほっと息をついて、木の中へ気配を消した。

「ギルベルト・ヒサムル、助太刀に参る！」

年を取れば取るほど深みを増す声が、凜と響いた。御丁寧に名乗りを上げた長身の老人は、躊躇なく戦闘を繰り広げる人間と魔物の中に突っ込み、身長ほどある大剣を振りかざす。ブンツと剣が唸り、刃が的確に魔物の胴を薙いだ。ギルベルトの標的となった魔物は、それと気付かないうちに体を横に真つ二つにされ、どうと倒れ込む。元が群れをなす猿だった魔物は、仲間を殺されて、いきり立った猿にしては凶暴な叫び声を上げて、鋭い爪でギルベルトへ襲いかかる。それをギルベルトは楯でがっしりと受け止めた。

「今だっ！」

「は？」

「呪文を」

「は、はいっ！」

いきなりかけられた声に、意味を捉えられず、きょとんとした冒険者の一人へ、セバスチャンは短く主の意図を伝える。魔法使いらしい少年が、前方で仲間が戦う間に準備をしていた呪文を、あわて放った。

か弱い火球が、ひよろひよろと飛ぶ。残念だが、この軌跡ではわずかに逸れるであろう。それは、呪文を放った本人も気付いているようだ。気の弱そうな少年魔法使いは、真っ青になった。

「あぁっ！ ごめんなさい。やっぱり当たらない」

「大丈夫です」

セバスチャンが、福々しい表情で、ぼんと少年の肩を叩く。え、と少年が、自分よりも視線の低い老人へ目を向けると、彼は、見てご覧なさい、と促した。

少年が視線を戻せば、頼りなく飛ぶ炎の球の先に、なぜか居るはずのなかった魔物がいる。気付いた瞬間、魔物が燃え上がった。獣の魔物が持つ毛皮は脂っぽい。炎をつければすぐに燃え上がる。火に焼かれ苦痛の声を上げる魔物は、のたうちまわり、すぐ隣に居た魔物へとぶつかった。炎はぶつかった魔物にも引火する。こうなると、魔物にとっては最悪のドミノ倒しだ。放っておけば、全て焼け死ぬ。

「当たらなければ、当ててしまえば良い」

炎を背に、ギルベルトはぶんと大剣を振って血を飛ばす。そのまま剣を鞘へ納めた。それを見て、エドは慌てて矢を弓につがえる。

音もなく、ギルベルトの背後を二本の矢が通り過ぎた。それは、熱さで暴れている魔物の急所に深々と刺さった。猿の魔物は数度痙攣をして、静かになる。

え、という表情をして、4人の新米冒険者とセバスチャンは、視線を木の上へと向けた。矢のやってきた方向だ。目を凝らすと、そこに銀色のなにかがかるうじて見える。見ているうちに、音もなく、

銀色の周りの枝葉が揺れ始めた。間もなく、ぬつと真つ白な顔が現れる。

「ひっ！」

エドが隠れていた木から顔を出したら、セバスチャンが驚いて引きつった悲鳴をあげた。驚かれるのは本意ではないが、今は気にしない。

火っ！ 火を消せっ！

エドは音を出さずに必死に叫ぶ。エドがそこにいる事を知っていた新米冒険者は、エドが顔を出したこと自体に、執事ほど驚いてはいない。が、エドが慌てている理由が理解できなくて、焦る彼をきよとんと見ていた。彼らは、エドの頼もしい仲間とは違う。口だけで意思を伝える事が出来ない。

っ！

エドは、空いた手で魔物の方向を示した。動かなくなっても、脂ぎった魔物はメラメラと燃え続けていて、火が鎮まる気配はない。このまま放っておけば、山の木々に炎が移るだろう。山が燃える。それは、絶対行つてはいけないミスだ。

「ああっ！ 火っ！」

エドの指し示す方を見て、魔法使いの少年が、真っ青になった。

「何！？」

少年の叫び声に、ギルベルトが目を眇める。ポーズを決めた後ろで、炎が上がり続けている事に初めて気づいたギルベルトは、素早く行動に移した。

「延焼物を避けるんだ！ 枯れ木を除ける。引火しそうな枝を切れ！」

「は、はいっ」

セバスチャンと4人の冒険者は、逆らう事を許されない声に、反射的に返事をする。

「魔法使いは、水だ。出せるな？」

「は、はい」

魔法使いの少年は、かくかくと頷いてから、魔法を紡ぎだす。その間に、ギルベルト達は、延焼を防ぐための行動に出た。

魔法使いの少年は慌てて呪文を紡ぐ。だが、焦っているせいか、言葉が回っていない。見ているだけで気の毒になるくらいうろたえていた。

少年の様子に気付いた年嵩の男が、仕事から抜け出してくる。彼は半泣きになっている少年の両肩をぼんと、叩いた。

「テオ、落ち着け」

「兄さん……」

同じ色の髪と瞳を持った二人は、兄弟だ。

「大丈夫、慌てるな 呼吸を整えて」

兄の言葉に合わせて、弟は瞳を閉じて、ゆっくりと深呼吸をする。よし、と言う兄の言葉に頷いて、テオは再び呪文を紡ぎだした。

細い歌声が、今度は正しい音を紡ぎ、ようやく水を呼ぶ。水は、術者の求めるとおりに火を鎮めた。

エドはほっと息をつき、木の幹へと体重を預けた。

流石元領主。緊急時に対する判断力と指示の的確さが、常人離れしている。野外に対する嗅覚は、鈍いようだが。

「よくやった！」

その領主は、大きな拍手をして若い冒険者達を褒めたたえた。

「詰めが甘くてすまなかった。獣の魔物は良く燃えるのだな」

覚えておこう、と彼は何度もうなずき、どこからとも無くメモ用紙を取り出す。そこへ、ペンで何かを書き始めた。

「……何をやっているんです？」

茶髪の戦士が、青い瞳に好奇心の光をたたえて、ギルベルトを覗き込む。ギルベルトは戦士と同色の瞳を和ませて答えた。

「メモじゃよ。物を忘れないためと、覚えるためには、メモを取るのが一番よい」

「へえ……」

戦士がメモを見たそうにしているので、ギルベルトは、ほい、と

ページを見開いて見せる。それを見て、戦士は眉をひそめた。

「達筆すぎて読めないよ……」

ハハハとギルベルトは大笑いする。どれどれと、戦士の仲間たちも寄って来た。

「そりゃ、躊躇なく見せるよな」

メモを見た濃い緑の髪の男が、失笑する。

「アール、これ、暗号化されているよ」

「何っ!？」

魔法使いのテオの指摘に、アールと呼ばれた青年は驚く。全くそうと気づいていなかった戦士に、笑いがはじけた。

セバスチャンは、和気あいあいと騒いでいる彼らを見ながら、それとなく木の下へと移動した。

「アドルさんの仲間ですね」

どこへともなく呟くと、そうだと答えが、頭上から落ちてくる。見上げれば、銀が有った。銀の髪を持った、すらりとした少年だ。

彼は、エドだ、と名乗る。

「新米冒険者だが、連れて行ってほしい」

「これも、ストーリーのひとつ?」

「だ、そうだ。俺はよく分からない。彼らとギルベルト氏を引き合わせるように言われただけだ。彼らも」

「彼らも?」

「あいつも困った悪戯好きなんだよ」

「あいつ? 誰です?」

かざりと葉が擦れる音がする。エドが肩をすくめたようだった。

第三話 にゅ めんばーず(前書き)

【この作品は、拙サイト「世暁」(<http://www.yoak.e.org/>)で公開している作品です

第三話 にゅう めんばーず

「あ、あのっ！」

青い目をキラキラとさせたアールは、背の高いギルベルトを見上げた。

「仲間にして下さいっ」

「仲間？」

唐突な申し出に、さすがのギルベルトも少々面食らったようだ。

「違う。間違えた！ 最初に、助けていただいてありがとうございます、だます、だ」

「……どういたしまして」

「こんな年でこんなに強いだなんて、さぞ、高名な冒険者と見た。ここで会ったが百年目。ぜひ弟子にしてください」

「……アール」

「何だ、ユーリウス」

何か可哀想なものを見るような目で、ユーリウスと呼ばれた赤毛の兄は溜息をついた。

「何か、色々おかしい。言い直せ」

「……そうか？」

きょとんとアールは首を傾げる。その光景に、ギルベルトは、大声で笑った。

「残念ながら、僕は高名な冒険者などではない。昨日ギルドに登録した、ホカホカの新人冒険者だ」

「「ええーっ……」」

驚きの声を上げたのは、アールともう一人、彼の後ろでニヤニヤとやり取りを見ていた青年だ。

「じゃあ、なんでそんなに強いんだよ。最初からレベル高いなんて、チートじゃん！」

濃い緑の髪的青年は、老人には少々理解が難しい表現をした。水

平面が高くて、イカサマ野郎？ 明らかに侮辱の言葉だが、彼の表情が正反対だ。なにか違う意味があるのだろうか？

「高名だとか、新人とか、チートとか関係ないっ！」

男性にしては高めな声を、アールは張り上げる。

「オレ達が四人で苦戦した魔物を、一刀両断する技術！ 素早く適切な指示！ オ、オレっ！」

アールは拳を握ってぶるぶると震え出した。口が戦慄く。興奮のあまり、言葉が出てこないようだ。

「どちらへ行かれる予定で？」

「！」

涙ぐみ始めた戦士を押しつけて。一際冷静に尋ねたのは、恐らく彼らの中で、精神年齢が最年長であろう、ユーリウスと呼ばれた赤毛の青年だ。興奮に水を差される形になったアールは、愕然と握り締めた拳を落とす。

「ユーリっ！」

「アールじゃ、話が進まない」

ユーリウスは、ぴしゃりと切り捨てる。後ろでひゃひゃひゃと笑う声が聞こえた。ユーリウスに切られて、明らかに肩を落としたアールを、指さして笑っているのは、緑髪の青年だ。

「ニコも黙れ」

「……う」

氷点下の言葉に、ニコと呼ばれた緑髪の青年も黙り込む。彼らの力関係が、会ったばかりのセバスチャンにも、なんとなく見えた気がする。

「儂等は、シイ山へ向かう予定だ」

仲間を黙らせて、再びギルベルトに尋ねたユーリウスへ、ギルベルトは答える。

「ボースで依頼を受けた。荒れて魔物化したらしい神を、鎮める」「えっ！？」

声を上げたのは、ユーリウスに叱られなかったただ一人だ。見る

からに最年少の魔法使い、テオ。

「貴方は、覲子なのですか？」

ほら。

セバスチャンは、エドのいる木の下でこっそり溜息を吐く。神を鎮めるのは、普通、巫覲の役目だ。

「巫覲と祭司が鎮められるよう、魔物を倒すのが、仕事だ」

「成る程。なら、冒険者の仕事ですね」

ユーリウスが、成程と頷いた。そうなのか？ と尋ねてくるアールに、まあ、魔物退治だからね、と答える。やはり「神」相手には「巫覲」だが、「魔物」となると「冒険者」になるのが、冒険者にとっても常識のようだ。

「じゃ、じゃあ、その手伝いをしたいっ！ 冒険者の仕事なら、オレ達の領分でもあるだろ？」

「元神だぞ！ 無謀だ」

ユーリウスが叫んだ。

「それがどうした」

「高い志も、命あつて物種だと、何故分らない？」

「高い志には、多少の危険や冒険がつきものだ」

「……多少？ 君の『多少』の定義には『少』が存在しないようだね」

「どういうことだよ？」

アールは胸を反らしてユーリウスを真つすぐに見る。ユーリウスも、負けまいと彼を睨み付けた。

セバスチャンは、ハラハラと二人の様子を見る。本気で二人は睨み合っている。切っ掛けがあれば殴り合いの喧嘩になるのではないかと、思うほど張り詰めた空気で。

「……どうしましょう」

困り果てて、セバスチャンは頭上のエドへ問いかけた。

「知らん」

にべもない。

そんなあ、と情けない声を上げそうになった時、ユーリウスが、盛大な溜息を吐いた。

「アールの頑固者」

そう吐き捨てるユーリウスの言葉には、一転して気安さがある。張り詰めていた空気が霧散した。

「分かっているよ。お前が、そうと決めたら絶対覆さないことを。だから、こうやって冒険者になっている」

……ユーリウスに同情したい。きっと彼は、自分と同類だ。

「いいか？」

ユーリウスは、弟とニコへ視線を投げた。

「ユーリが止められないアールを、おれに止められる訳がない」

「僕も手伝いたい」

消極的な意見と、積極的な意見。アールの表情が、喜びで輝いた。

「と、言う訳で、オレ達を仲間にいれてくださいっ！」

アールが青い目を輝かして、改めてギルベルトへ申し込んだ。

「主はどう答えると思う？」

エドの好奇心に満ちた声に、セバスチャンは自信をもって、一言一句違わずに答えることができる。

「『お主らの熱意、しかと受け取った。よろしく頼むぞ、仲間よ』」
強い願いを無碍にできるほど、ギルベルトは冷淡ではない。領主としては理知的で冷静だが、その本質は全く違う事をセバスチャンは知っている。彼の本質 努力と根性を歓迎する熱血漢が、この熱い申し出を拒否する訳がない。

ギルベルトは、青い瞳を輝かせる青年の手を、彼に負けないくらい瞳を輝かせて取った。

「お主らの熱意、しかと受け取った。よろしく頼むぞ、仲間よ！」

「……お見事」

エドが称賛の言葉を落とす。その言葉に偽りはないのだが、素直に喜べないのは何故だろうか。

剣士アールが仲間に入った！

武闘家ユーリウスが仲間に入った！

軽業師ニコが仲間に入った！

魔法使いテオフィルが仲間に入った！

互いの自己紹介をしているうちに、セバスチャンはエドを見失ってしまった。一番彼の位置を把握していそうな、軽業師のニコにそっと訊ねるが、彼も見失ったようだ。

「あいつ、テオフィルと同じ年な癖に、技術は一流だからな。本気で隠れたら、誰も見つけられない」

ただ、どこかで自分達を見てはいるだろう、という答えだった。

「君達は、何をどのくらい知っているのです？」

「何の？」

ニコは首を傾げた。質問が悪かったのかもしれない。

「なぜ、ここに？」

「力の見極め。新米だし、若造だから、どの程度の力があるかの見極めも兼ねた魔物退治」

「エドは？」

「見極め役。まさか、自分より年下が見極めにくると思わなかったけどな」

成程、そう言う口実で、彼らをここに導いた、と言う訳だ。

「試験中に、別の行動をしてもいいのかい？」

ニコは苦笑して、首を傾げた。

「わからない。でも、アールは気にしない。自分の思うとおりにか、進めないんだ」

「納得のいく理由ですね」

「へえ……」

セバスチャンが、アールの行動に理解を示すと、ニコは意外そうな表情で声を上げた。

「こういうの、駄目だって言うタイプだと思ったな」

「人は、いつしか悟るものです」

遠い目をして答える。

我が道を進む者に、生まれてから60年近く仕えていて、悟らない方がおかしい。彼がそうだと決めたら、常識すら無意味だ、と。

「ユーリ辺りと気が合いそうだな……」

「アタクシも、そう思いましたよ」

遠い目をしながら、セバスチャンは、確信する。アドルは、ギルベルトとアールを引き合わせて、こういう結果になることを期待していたのだらう、と。

視線の先では、早く出発するぞと、ギルベルトとアールが、セバスチャン達を呼んでいた。

エドは、一つになった二組の新米冒険者を追う。平均年齢にする、と、中堅冒険者のそれになるが、平均年齢の周囲に彼らはいない。よくまあ、これで気が合う、と感心するくらい、彼らはすぐに打ち解けていた。

このまま、一行はレブスへ向かうだらう。

生け贄の娘の、悲痛な叫びを聞くだらう。

そして、村人たちに用意された台詞から正しい情報を得て、彼らは山へと向かうだらう。

彼らを取る作戦は、十中八九囹作戦だろうと、アドルは言った。テオフィルの背格好が、生贄に似ている。それに、気付くはずだ、と。本当の生贄を囹にするのは愚策だと、ギルベルトは知っている筈だから、必ず代役を立てるだらう。

フェイスが作り、アドルが具体化したシナリオを、エドが反芻しているうちに、一向は分岐路にたどり着いた。

「……分かりやすい立て札ですね」

道が、二本に分かれている。木々が深いため、先は見えない。だが、分岐の間に新しい看板が立っているので、棒を倒して道を選ぶという博打を行わなくてもすみそうである。

右手がレブス。左手がシイ山入り口。

立て札には、そう書いてある。

まずは、レブスへ行って、先に帰っている依頼人と、本当の依頼人である村長、そして生贄に選ばれた娘に話を聞くべきだろう。神の声を聞いたと言う巫女に会えるのであれば、彼女にも会いたい。

セバスチャンは、そう考えて右手を見る。この先に、集落が本当にあるのかと思うような山道だ。だが、この先に集落があることを、セバスチャンは疑わない。ギルベルトが治めていたエクウス領にも、そんな村は点在していた。そもそも、カルーラ全体が、山の隙間に人が住んでいるような国である。

「……ふむ。旅人が迷わぬように、朽ちる前に看板を変えているのだな。ボースの牛野郎も、案外気が回る」

国が管理する大きな道以外は、それぞれの領主が整備を行う。そのため、領主によっては、目に届かない小さな道の整備が疎かになる事も珍しくない。

話が変わるが、ボースとエウクスは友好関係にある。が、ギルベルトはボース領主を高く評価していない。どっしりとした身体と、のんびりとした所作が、彼のリズムと合わないのだ。セバスチャンと二人きりの時、ギルベルトは隣領の主のことを『牛野郎』と言う。言い得て妙だ。動作や性格だけでない。見た目がそもそも、牛っぽい。

「にしても、それは評価低過ぎますよ」

「そうかな？」

ペースが緩く、シャキシャキ動くギルベルトとは合わないが、ボース領主は決して愚鈍ではない。牛の食事のように、何度も考えを

反芻して答えを出す、慎重型なだけだ。吟味し過ぎ、瞬発力に欠けるのが、玉に傷ではあるが。

「村の幹線ですよ、これは。整備を怠る事はないでしょう」

「そうだな。失礼だった」

ギルベルトは頑固だが、分からず屋ではない。自分の考えが間違っているとは認めれば、素直に認める。

「では、きちんと整備された真新しい看板を信じて、左へ進もう」

「え、何で？」

セバスチャンの疑問と驚きを口にしたのは、アールだ。

「村で情報集めたりは、しないんですか？」

その通りである。セバスチャンは、アールに同意して、首を上下に振る。

「何を言っておる」

ギルベルトは、むしろそれがおかしいとばかりに声を上げた。

「そんな事したら、村人と儂等は無関係ではなくなるであろうが！」

「だけど、情報も無しで……」

「せめて、数人が村へ探りに行っても」

「ならんっ！」

ギルベルトは頑なに首を振る。

「倒す者と祀る者、全く無関係でなければいかんだ！ 儂等はずっと村に居る訳ではないからな」

セバスチャンは、はつとする。そうだ、だからギルベルトは、ニコラスを先に帰したのだ。ギルベルトの判断は、正しい。自分たちが流れ者である以上、情報不足というリスクを負ってでも、左の道を選ぶべきなのだ。

「どういふわけですか？」

しかし、年若い冒険者達には、理由が分からない。

「情報不足で強力と思える魔物と戦うのは、無謀です。猪突猛進が服を着て歩いているようなアールですら、それを知っている」

「ユーリ……」

アールが、情けない表情になった。酷い言われようだが、反論ができないらしい。それがアールの魅力なんだよ、とテオフィルが彼の背を優しくなでる。それだけで慰められるあたり、アールは単純だ。

「おれが行くか？　ちゃっちゃんと情報を仕入れて、夜が明ける前に戻ってくるからさ」

「田舎村の女には興味がなかったんじゃないのか、ニコ」

「カミサマの生贄に選ばれる娘の器量には興味がある」

「動機が不純。却下だ……が、全員でなくても、誰かが行くべきだとは思います」

下心丸出しのニコの提案をあつさり切り捨ててから、ユーリウスは再び主張する。彼の中で、情報と言うのは重要なものと位置付けられているらしい。いや、彼だけではない。若き新米冒険者達は、皆そう思っている節がある。

確かに、情報は重要である。

それはギルベルトも、セバスチャンも認める。彼らが40年やってきた仕事は、その情報自身を扱うものだったのだから。だからこそ、知っていることもある。

「人から聞くものだけが、情報ではない」

ギルベルトが、ゆっくりと口を開いた。誰かに聞かせる為に得た、彼の技術である。

「情報など、歩いているだけで得ることができる。いや、歩いて得る情報こそが、重要だ。百の証言よりも、一の体験を得るべきなのだ」

「しかし、事前情報もなく突っ込んでしまえば、準備不足になる可能性もある。危険です」

「だから、すべての感覚を研ぎ済ませて、情報を得るんだ……例えば、ここまでの道でも得られることは、ある」

「この道で？」

「なあ、セバス？」

主に問われて、セバスチャンは、そうですね、と頷いた。主の側で60年。彼ほど洞察力がなくとも、ある程度の情報収集力と選別力は鍛えられている。

「真新しい看板がかけられるほど整備した道なのに、魔物が現れています。頻度は、山に向かう程増えていますね。少なくとも、山に、いやな影響を与える何かが居ることは確かです」

「……あ、確かに」

アールは、ぽんと手を打った。

「しかし、それは神が荒れているからだ、事前に分かっています」
「裏付けになる。荒れた神の力も、分かるな……神の力は影響範囲に比例することが多い」

「つ、強いつて事じゃないですか！ こんな装備で大丈夫なのですか？」

杖をギュツと握って、テオフィルが悲痛な声を上げる。

「ボースで、可能な限り装備は整えておるだろう？ 田舎村に何を期待する？」

「そ、そういえば」

テオフィルが真っ青になって頷く。

「もつとも……」

ギルベルトは、彼のすぐそこに伸びていた枝を、優しく掴む。夏の気がまだ濃い立秋。枝には青々とした葉がついていた。

「植物は元気だ。この範囲なら、どうにかなるだろう」

道に現れた魔物は、動物や虫のモノが殆どだった。どうやら元凶には、植物や現象が魔物になるほどの影響力はないと、考えていいだろう。領内に出現する魔物を、脅えた人の証言や、影響されて起こった事象で見極める力も、領主には必要である。ギルベルトの見立ては、土地勘の無さを差し引いても、大きく間違えてはいないだろう。

「これなら、リスクを侵してまで村へ行く必要がない。そう考えた

のだが？」

「なあ」

ニコが気安くギルベルトへ声をかける。

彼の、ギルベルトへ対する口調は、セバスチャンをいらつかせるだが、彼は間違っていない。仲間が対等に接する時の、正しい姿のひとつなのだと、自らへ説明する。

「さつきからじーさんが言っている、『村へ行く危険』ってなんだろう？　そこに納得できないから、ユーリウスは、つかかるんだぞ？」

「理由？　わからんのか？」

分らないから聞いている、とニコは答える。答えは言っているはずだが、それでは十分に伝わらないのだろう。恐らく彼らは、そういう考え方をしたことがないのだ。

「生贄を求める神は、村が祀る神だ。レプスの民は、神が鎮まつて、再び山を守ることを望んでいる。その理由は分かるな？」

「新しい神を祀るのも、大変ですからね」

若者たちは、頷いた。

「祀り直すには、とりあえず祭司の力で鎮められる程度にまで、神をおとなしくさせなければならぬ。魔物化した神なら、弱らせて、魔物として存在できない程度だな」

和神が荒れると荒神と呼ばれる。荒神の箍が外れると魔物化する。その手順の逆を行うのだ。魔物を滅して荒神に戻す。神としての力が弱っていた場合、そのまま消えてしまうこともあるが、そこまで考慮にいれることは、人の身では不可能だ。それこそ、神のみぞ知る。魔物ではなくなった荒神を、丁寧に祀り上げて和神とする。

「わかるよ、それは」

そこまでは、若者たちも理解している。山ごとに神のいるカルーラは、神へ祈る人の為の教会よりも、神が住まい祀られるための神殿の方が多い。どの地でも必ずなんらかの神を祀った小さな神殿があり、そこには神を祀るまでの物語がある。

「我々の役目は、魔物を倒す事」

「だな」

「神を鎮めるのは祭司　村長および、村人たちの役目」

「うん」

「自分の身になって考える」

「？」

「力尽くで自分を傷つけ倒した奴の仲間と、それとは全く関係ない人。自分を必要だと言う願い、どちらを叶えたい？」

「自分より強ければ、その力を認めて協力する」

「前のは、なんかむかつくな……自分より力があるなら、てめーがしろ、と」

アールとニコの意見が分かれた。ギルベルトは、満足そうにうなずく。

「そうだな。まず、ニコの意見を採用したとする。そうすると、倒した者と繋がる村人の願いなんぞ、叶えぬわな。神は、鎮まらない」

「……あれ？」

ニコが、引きつった笑みを浮かべて首を傾げた。

「では、アールと同じように感じたとする。自分より強い者に繋がる村人の願いを叶える。だが、自分より強い者がいなくなったら？」

「あ、そういうことか！」

ぽん、とテオフィルが、手を打った。

「力で上から押し付けたら、常に上位にあることをしめさなきゃいけないんだ。でも、実際に魔物を倒した冒険者は、魔物を倒せば村から去る……従う理由である力のある者がいないと知れば、また、荒れてしまうんだ」

理解したことが嬉しいのか、にこにことするテオフィルの頭に、ユーリウスはぽんと手を置いた。くしゃくしゃと赤毛をなでながら、思案気に口を開く。

「だけど、後者　全く関係の無い人が『お願い』すれば、力を誇示する必要がないし、変な反感も買わない？」

「そういうことだな」

理解したらしい兄弟に、ギルベルトは満足そうに頷いた。

「神も、叩かれて、落ち着けば、民の声が聞こえるだろう。元々ずっと自分を祀っていた者達の声だ。聞こえれば、応える」

「レプスの人は、ひたすら祈り続ける。魔物を倒したのは、たまたま山に入り込んだ冒険者。その構図を保つことが必要……」

「故に、接点を持ったと認識されぬよう、村へは行かない」
なるほど、と、腑に落ちた表情で、若者たちは互いに顔を見る。

「わかりました」

アールが答える。

「じゃあっ！」

「でも、もう遅いから、山への出立は明日にしませんか？」

「……え？　せつかく行く先が決まったのに？」

「夜は危険です」

アールは空を指さす。つられて見上げれば、木々に遮られ、わずかに覗く空は、緋色に染まっていた。

これは、アールが正しい。

「アドル！　アドル！」

白い岩の洞窟に、掠れ気味の低い声が響く。これが、歌い出すと幅の広い豊かな響きを持った声に変わるのだから、世界は不思議に満ちている、と名前を呼ばれた者はのんきに思った。

「うるさいよ、エド」

ガン、と鈍い物を叩いた音と共に、落ち着いたアルトが聞こえた。アドルはくすりと笑う。入り口近くにいたシリイが、力尽くで、騒ぐエドの口を塞いだらしい。シリイは力加減を知らないが、エドは丈夫だから、問題ないだろう。

案の定、静かになつて間もなく、わずかな明かりに輝く銀髪の少年が、元気に姿を現した。

「持場を離れていいのか？　夜は危険だから、目を離せないって言

つていたのはエドじゃないか」

「魔よけ草撒いてきた」

それよりも、とエドはひどく焦った様子だ。予想外のことが起こったか？

「どうした？」

アドルは姿勢を正し、深い青の瞳をエドへ向ける。シリイも幾分緊張した面持ちになった。お人好しで単純な奴だが、判断力に特に、危険な時の判断力に信頼を置いている。そんなエドが、飛び込んで来たのだ。一大事と見ていい。

「あいつら、村へ行かないで直接山へ向かうつもりだ！」

「……………あそ」

「え、なんだよ、その冷たい反応!？」

前言撤回。少々評価を下方修正する必要があるそうだ。

「あいつら、情報不足で突っ込んでくるぞ。あと、村にいるフェイスを呼び戻さないといっ」

「フェイスは、今日村に彼らが行かなかったら、戻ってくるだろうね」

入口に立つシリイの言葉に、エドが振り返った。

「あ？ そうだったのか？」

「あの子がクライマックスを見逃す訳がない。そのくらいの判断はするよ」

アドルはそうだね、と頷く。彼女の頭は結構お花畑だが、決して回転が悪い訳ではない。それに、自分の求める物に関する嗅覚は、恐ろしく鋭い。彼女が、自身で作ったシナリオの、クライマックスを見逃すような間抜けはしないだろう。

「……………そういうものなのか」

「そういう子だよ」

シリイがうんうん、と頷く。彼女もアドルと同意見なのだろう。彼女の真価を知らないのは、エドだけだ。フェイスがうまく猫を被っていると言うよりも、エドが鈍すぎるだけなのだが。

「なら、いい。でも、ジーさん達は？ 村へ行かなければ、真相へ至るヒントも、折角の伏線も知ることができないぞ。それはそれで困るじゃないか！」

真相とは、仕立て上げたシナリオのことではない。生贄事件の真相である。伏線は……まあ、色々だ。エドの言う通り、それらの中には、道中で把握してもらわないと、困る物がいくつかあった。

「問題ないんじゃないの？」

だが、アドルはそれに関して楽観的だ。

「相手は40年、それなりに良い統治をして来た領主だ。良い領主にも種類は色々あるけど、ギルベルト・ヒサムルは、判断力と状況把握能力に定評がある」

アドルの持つ情報網では、ギルベルトは、平時よりも乱世で生きるタイプだと評価されている。冒険者のような荒事に、実は向いているのではないかと、アドルは考えていた。年をとりすぎているのが、惜しい。

蛇足だが、領主の右腕は全く逆のタイプだ。平時で活きる穏やかなタイプ。この二人は、凹凸巧く噛み合い、魔物による荒廃が長引き過ぎてある種の平穏すら存在する今の時代に、ちょうど良い統治をしていた。

「足を踏み入れればわかるだろう。この山が『普通の荒れた神のいる山』と違う事を」

「……そうか？」

疑問形ながら、すでにエドは納得しているようだ。アドルの言葉に対して素直なエドに、アドルは少しイラっとする。

「だから、さっさと行け。夜は危険なんだろう？」

「あ、ああ。そうだな」

しっし、と追いつきように手を振るが、彼は怒らない。くだらない用件で持ち場を離れた者は、邪険にされても仕方がないと、分かっているからだ。

「すまない、早とちりした」

それ以上のことは、全く分かっていないだろうけど……

「気にするな。エドのお間抜けは今に始まった事じゃないから、問題ない」

「なんだとぉー!」

エドがようやくいきり立って怒鳴る。アドルは声をあげて笑った。

第四話 くらいむ まうんてん(前書き)

【この作品は、拙サイト「世暁」(<http://www.yoak.e.org/>)で公開している作品です】

第四話　くらいむ　まうんてん

か細い音が聞こえる。

次の瞬間、目の前の毛皮が凍りついた。動きの止まった魔物へ、セバスチャンは力いっぱい剣を叩きつける。鶏を絞める時に似た感触がして、魔物の首が切断された。大きな毛玉から長く首が伸びて、その先端の小さな毛玉に顔がついていた魔物は、鶏大の鳥の姿に戻る。

「ふう」

セバスチャンは腰を叩きながら伸びをして、当たりを見回した。ふんとギルベルトが振った大剣が小さな魔物を複数薙ぎ払ったところだった。地面に水が散る。アールの剣が、毛玉を両断すると、木の葉が舞い散った。素早い動きで、ニコが魔物を翻弄し、刺すような蹴りで、ユーリウスが、魔物の隙を突く。

今、襲ってきた魔物は、これで片付いたようだ。

「やっぱすげーわ、じいさん」

投げた短剣を拾いながら、ニコが感嘆する。反射的にセバスチャンはニコを睨みつけてしまい、自省した。これは無礼なのではない、と三回心の中で呟く。幸い、彼はセバスチャンの視線に気づかなかったようだ。

「おう、そうか？」

ギルベルトはまんざらでもない様子だ。

「剣圧だけで水を斬るか、普通？　しかも、このでっかい剣で、こんなひよろひよろとしたじいさんが」

ニコは、乾いた地面にできた水の染みを蹴る。地面に染み込まなかった水が、小石と一緒に撥ねた。

「なかなか、驚きだらう？」

「ああ」

ニコは素直に頷く。ニコの後ろで、アールがこくこくと頷いてい

た。

「だが、お主らも凄いな」

「何が？」

「ここにきて、めきめきと腕を上げておる……若さの特権かな？」

「そんなに、上がってる？」

実感がないらしい若者へ、上がっているとも、とギルベルトは太鼓判を押す。

「ここにいる魔物は、街道でお主らが苦戦していた奴より、ずっと強いぞ」

「あの草の塊が？」

「……まあ、あれは斬れば散るが」

ギルベルトは苦笑する。

アールが斬った木の葉の塊も、ギルベルトが薙ぎ払った水滴の魔物も、特別珍しい魔物ではない。町中に現れる事もある。驚きはするが、一般人でもどうにかなる程度の魔物だ。台所に出た水滴の魔物を、パニックを起こした主婦が踏み潰したとか、庭師がそれと知らずに木の葉の魔物を切り落としたとか、そういう話もあるくらいだ。

「必死で背伸びをしている時は、本当に大きくなっていることに気付かないものだ。今は、一生懸命精進するが良いさ」

ふと立ち止まった時に、驚くのだ。自分の歩いてきた道の長さにかつての自分の青さに。それこそが、成長の証である。

「うーん。じいさんの言うことは、なんか説得力があるな」

「年の功だ」

「自らそう言われると、一気に説得力が無くなりますけどね」

「む……そうか」

「ギル様、皆さん」

会話が弾んでいるところ申し訳ないが、セバスチャンは低い声で仲間を呼んだ。

「また、来ました」

言う前に、ニコが気配を見つけて、鋭い視線を投げる。アールが剣を構えた。こういう所作を見れば、確かに彼らは成長しているとわかる。若さゆえの成長力か。羨ましい限りである。

「キリが無いな」

呟くギルベルトの声に、飽きが見えた。

「逃げるぞ」

「え？」

「はい？」

「何で？」

「あ、あ？ あっ！？」

「……はいはい」

ギルベルトは、敵に背を向け逃げ出した。来た道を戻る事なく、前へ逃げるあたりが、憎たらしいまでに冷静な逃亡である。

一方、若者たちは、ギルベルトの気紛れな転身に、思考がついて行かないようだ。

「はいはい。上です。行きますよ」

テオフィルの背中を押して、セバスチャンは促す。

「魔物は？」

「雑魚を相手にしても、キリが無いでしょう？」

「た、確かに」

素直に育ったらしい若者は、セバスチャンの言い分に納得した。

ギルベルトの後を追いかけるために走りだした青年たちの背を見て、セバスチャンは心の中で苦笑する。

魔物退治に飽きたから逃げただなんて、考えもしないんだろうな

……

アール達は、背の高い老人を、いつのまにか慕い、尊敬し、憧れているようだ。勇気と冷静な判断力をもつ人物だ、と。それをあえて幻滅させる必要も無いだろう。セバスチャンも、自分の主が慕われ、尊敬され、憧れになるのは、うれしいし、誇らしいのだから。

身体能力において、人は同等の大きさの動物に適わないことが多い。そんな動物の魔物とは、比べるのも失礼だ。人が魔物に勝てるのは、身体能力以外のモノで勝るからに過ぎない。つまり、障害の無い道を追いかけてこして、逃げ切れる訳が無いのだ。人の気配を嗅ぎ付けて襲って来た魔物と、逃げるギルベルト達の距離は、確実に短くなっていた。

「セバスさん、殿は俺が」

一番素早く動けるのに、あえて速度を緩めてセバスチャンが来るのを待っていたユーリウスが、言う。ちらりと後方を見たら、思ったよりも魔物が近くにいた。自分の鈍足に気付いて速度を緩めてくれたユーリウスに感謝だ。

「そ、それは助かります。お、追い、つかれ、た、ら。一緒に、お願いします」

「無理しなくていいですよ。俺は結構余裕ですから」

小柄で、ずんぐりとしたセバスチャンは、しなやかな豹のようなユーリウスのように、速く走る事はできない。年老いたセバスチャンは、若く体力の充実したユーリウスのように、余裕がない。

「その祠へっ！」

体力の限界が見えてきた時、ギルベルトの年老いても凜とした声が響いた。

顔を上げれば、ギルベルトのすぐ後ろに、小さな祠があった。ギルベルトの後を追っていた若者たちが、次々と入る。

「セバスジーさんっ！ 気張れっ」

ニコが入り口に残って、息が切れているセバスチャンを励ます。

そう……無礼だが、いい奴なのだ、ニコは。

言われなくても、と荒い息の中で呟いて、セバスチャンは、走ることに専念する。申し訳ないが、背後は彼のすぐ後ろを走るユーリウスに任せるしかない。

「とうちゃーく！」

ニコの軽い声と同時に、セバスチャンと、ユーリウスが小さな祠になだれ込む。祠に入るなり膝をついてしまったセバスチャンの肩を、ユーリウスが、ニコが、ポンと叩いた。労りと、健闘を称える、若者たちの合図だ。

「ハハッ」

なんだか愉快になって、セバスチャンは、荒い息の中で笑い声を上げる。

「体力が落ちたな、セバス」

祠の壁に寄り掛かって、ギルベルトがセバスチャンを見下ろしていた。わずかに上がった唇が、セバスチャンをからかう気満々である事を示している。

「そりゃ、事務仕事が多かったですからね。雑用に走り回っていた昔のように、いきませんよ」

セバスチャンは、主の足元へ腰を下ろし、改めて祠を見た。

祠は人が5、6人入れる程度の、木造建だ。建物は小さい割には頑丈で小綺麗だった。山へ登る者の休息所と安全祈願を兼ねているのだろう、奥には、小さな祭壇が安置されている。そこには、旅人の安全を見守る神の名が書かれていた。他になじみのない神々の名が幾つか。この土地固有の神だろか。シイ山の神かもしれない。

「儀式などで山に登る者の休憩所だろう。ここでも何等かの儀式があるかもしれない」

「そんな感じですね」

お邪魔します、とセバスチャンは祭壇に向かって手を合わせた。

「魔物は？」

祠の入り口から外を伺うアールとニコに、ギルベルトが訊ねる。

「祠には寄れないみたい」

「見るよ、諦めて去って行くぜ。カミノゴカゴって奴か？」

「……そのようだな」

成程、とギルベルトは何か納得したように頷く。

「ニコ、お主、少々偵察に行かんか？」

「偵察うゝ？」

ニコが、思いつきり顔をしかめた。

「実は、この山のどこに、目標の魔物がいるのか知らなくてな。ちよちよと行って、探ってきてほしい」

「……こんなに魔物がいるんですけど」

不満げな表情を浮かべているが、村でちゃんと話を聞けば良かったじゃないか、と今更文句を言つてこないあたり、彼らは潔い性格のようだ。

「気配を消して歩くくらい、訳無かるう？」

「うっ」

ニコは言葉に詰まった。後ろでユーリウスが笑い声をあげる。

「実は、苦手なんだよな、ニコは。俺の方が、忍び足はうまい」

「なら、二人で行つてきてほしい。そっちの方が、心強かるう？」
にやりと笑う。挑発しているのだ。

「じ、じいさんはどうなんだ！」

「儂は、正面突破は得意だが、隠密行動に長けておらん」

ギルベルトは、控えめに断言した。長けている、いない以前に、全く出来ないじゃないか、とセバスチャンは、心の中で呟く。

彼の主は、存在を主張する術は天下一品だが、逆に存在感を無くす事については、素人以下なのだ。簡単に言うと、とにかく、目立つ。

存在感の無さ、気配を絶つ巧みさで言えば、一日の長があるのはセバスチャン自身だ。

「……ワタクシも行きますか？」

「セバスのじーさん、出来るのかよ？」

「失礼な」

セバスチャンは憤つてみせる。

「そちらは私の分野です。体力の低下は否めませんが、若造には負けませんぞ」

胸を張った。場内のあらゆるスキャンダルを陰で見つけ続けて40年。『執事は見た!』というシリーズの半分事実の物語が、物語を作るのが好きな使用人によって、できるくらいなのだ。因に、ひそかな自慢である。

「なら、ニコとセバスで行って来い。セバスなら、儼が求める情報くらい分かるな」

「お任せ下さい」

ようやく整った息で、セバスチャンは丁寧に答える。

まだ、不安そうなニコに、私が先に出来ますから、10数えてから出てくださいと言って、セバスチャンは先に祠から出る。百の言よりの事実だ。

10秒後、セバスチャンはニコの不安を十分に拭い去る事に成功した。

ニコとセバスチャンの、縦も横も、年齢までもがデコボコなコンビは、道から一本入った道無き場所を進んでいた。道を失わないように、視界に必ず道が入る程度の距離を保つ。気配を消し、足音を消して歩けば、魔物は人に気付かないようだ。臭いは、森の緑が消す。

「やっぱり、あった」

四半刻ほど歩いたところで、セバスチャンは目的の物を見つけた。「何が?」

ささやかな呟きを聞いた、ニコが問う。セバスチャンは太い腕を持ち上げて、一方を指さした。

「また、祠あ?」

「とりあえず、入りますか。疲れました」

「本当に、体力無いのな」

「貴方に『じーさん』と呼ばれるだけは、ありますよ」

「ギルのじーさんは、規格外だな」

「……それは、否定できませんね」

暇があるとは思えなかったが、暇を見つけては体を動かしていたギルベルトが、老人として規格外なのは、確かである。セバスチャンだって、同じ年代の中では元気すぎる方なのだ。

二人は祠に入った。木造の小屋だ。やはり奥に祭壇がある。書いてある神の名前も同じだった。

「……神のいる神殿まで、同じくらいの間隔で祠がありそうですね」「あと二つで、本殿ってトコか？」

祭壇を覗き込みながらニコが言う。

「何か見つかりました？」

「これ」

ニコが示した方を見る。祭壇の奥、中央上部に古ぼけて読みにくくなった額があった。目を凝らして見れば『参ノ祠』と読める。今まで一つしか祠を見ていないのに『参』と書かれているのなら、神殿に近い方から数えていると考えてもいいだろう。

「あん時はよく見なかったけど、下の祠が『四の祠』だったら、確実だな」

同じように考えたらしいニコが、一人で納得したように頷く。

「んで、戻る？ 行く？」

「戻りましょう」

ニコの問いに、セバスチャンは迷わず答えた。

定期的に休憩する場所があるのであれば、進むのに問題ない。祠は魔物に対する結界として、ちゃんと作用しているからだ。ただ、先へ進む度に、次の祠の様子を確認する必要があるだろう。この祠が無事だからといって、次の祠も無事とは限らない。祠の結界が壊されているかもしれないのだ。

「んじゃ、じーさんの息が整ったら、出発だな」

「……………」

労りとからかい、割合は良くて三七と言ったところだろうか。

「もう少し、年上に対する態度をなんとかできないのですか？」

「年上？」

声を低めたセバスチャンを、ニコは鼻で嗤った。

「敬語を使えばいいのか？ 手を取って山道を登ればいいのか？

一番風呂を譲ればいいのか？ ……仲間には？ それって、失礼じゃねえの？」

「！」

セバスチャンは、驚いて目を見開く。

「やれって言えばやるけどさ……」

「いや」

そういう考え方も、ある。

年齢を、身分を越えた対等の仲間。ギルベルトとセバスチャンには、もう築けない種類の絆。

「あなたが正しい」

だからと言って、そこに思いやりや、敬意がない訳ではないのだ。現に彼は、貧相なセバスチャンの体力をからかいながらも、彼の体力に合わせて動いてくれているではないか！

「駄目ですね、年を取ると頭が固くなる」

「年のせいなのか？」

ニコが驚いて声を上ずらせた。

「どういうことです？」

「標準装備だと思った」

「……………」

無礼に聞こえるのは、凶星だからだ。腹が立つのは、それを受け入れることができないセバスチャンの器の小ささなのだ。

そう思うことにした。

ギルベルト達が待つ祠へ戻ると、案の定『四の祠』と書いてあった。ギルベルトに次の祠と額に書かれた名前の事を報告すると、やはりな、と答えが返ってきた。やはり彼も、次の祠があると予測していたのだらう。セバスチャンが意見を述べると、彼は同意した。

「儂もそう思う。やはりセバスは、儂の求める情報を、きちんと持ってくるな」

「何年付き合っていると思っっているんですか」

言いながらも、嬉しさは隠せない。何十年一緒でも、それが当然となっても、主と意見が合うのは、嬉しいものだ。

じいさんがじいさんに褒められて、子供のように喜んで言ううニコの軽口も、気にならない。

我ながら単純だというのは、重々承知だ。

セバスチャンが予想した通り、山道にはほぼ等間隔に祠があった。単純な割り算なら、最後の祠は山の八合目にあたる。日はまだ高かった。魔物と戦ったり、祠で休んだりしても一刻もかかっていない。日歸りにちょうどいい山だ。

「最後の休憩所とみていいだろう」

『壱の祠』と書かれた額を見ながら、ギルベルトは言う。アールが生真面目な表情でうなずいた。休憩を取ろうと、それぞれが床に腰を下ろした。今までの休息に比べて、だれもが緊張していた。ユーリウスが、拳の保護にと手に巻いた布を変え、テオフィルが蜜入りの飲み物で喉を潤している。アールは、魔物の血で汚れた剣を取り出して、顔をしかめる。

「もう、刃がないよ」

なけなしの金で買ったのであろう。彼の安物の剣は、限界のようだ。鍛冶氏に研ぎを頼んでも、新しい剣を薦められるだろう。ギルベルトも、自らの大剣を取り出す。アールの剣と違い、ボースの武器屋で一番高かった剣は、整備さえちゃんとすれば、まだ当分使えそう。刃は欠けておらず、刀身はまだ輝いている。鋭い刃に己を写し、ギルベルトは何かを考えていた。

セバスチャンの剣は、そう汚れていない。若者たちの成長が目覚ましく、どんどん彼の出番がなくなるのだ。もともと荒事が苦手なセバスチャンは、出番を取られて悔しいとは思わない。むしろ、若

者たちに対して、頼もしさを感じていた。

セバスチャンは、祠の窓から外を見た。全ての祠に共通すること
で、存在する一つの窓からは、必ず山頂が拝める。

休火山であるシイ山は、最初から木々の背丈が小さい。木々が若いのだ。五合目を過ぎたところ、木は人を隠す手段とはなり得なくなつた。八合目であるこの周辺は、木が絶えている。白い砂利や岩。そして、その間から健気に芽を出す草がところどころに見えるだけだ。

ここから見える山頂に、直線で構成される不自然な物体があつた。恐らくあれが、神の住まう神殿なのだろう。

「なんだ、アール。悲惨な状態だな」

ユーリウスの落ち着いた声が響く。振り返れば、アールの剣を覗き込むユーリウスの姿があつた。

「途中で折れたらどうしよう……」

情けない顔で、アールが嘆く。ユーリウスの脇から覗き込めば、単なる鉄の棒になった剣が見えた。いや、鉄の棒の方が、厚みがあるだけかもしれない。薄い刀身は無数に刃毀れしており、その中には深くまでひびが入っている場所もある。目標の魔物との戦いで耐えるどころか、たどり着く前に折れてしまいそうだ。

「ワタクシの剣を使いますか？」

運よく、セバスチャンの持っている剣は、アールの剣とタイプが似ている。ボースで主と共に買った新品で、そう使い込んでいる訳でもないから、変な癖もついていない。

「でも、そうするとセバスさんが丸腰になってしまう」

「身を守るための懐剣くらいはありますよ」

セバスチャンは、笑って腰の剣を鞘ごと取り出した。

「それに、ワタクシが剣を振るうより、アール君が振るった方が、ギル様の力になる」

アールの剣技は、セバスチャンのそれを、すでに凌駕していた。若者の成長は、驚くほど早い。

「…………セバスさんってさ」

差し出された剣と、差し出すセバスチャンを交互に見て、アールは口を開いた。

「ギルベルトさん中心だよな。基準が」

「それが何か？」

それが、セバスチャンの生き方だ。

「ギルベルトさんが危なくなったたら、自分の危険を顧みず飛び出すよね」

「それは、当然です」

主の全てを自分よりも優先する。それが、執事のあるべき姿だ。

「なら、セバスさんは、きちんとした武器と防具をきちんと持ってなきゃいけないよ」

「？」

アールの言いたいことが分からずに、セバスチャンは首を傾げた。

「…………わかんないかなあ」

セバスチャンの様子に、アールが苛立たいし声を上げる。

「守るなら、ちゃんと守りきらなきゃ！」

「武器も持たずに、もしもの時どうやってギルベルトさんを守るのか、って話です」

ユーリウスが、怒鳴った後にむっつりと口を閉ざしたアールの代わりに口を開く。

「命を懸けて守るよりも、いかに命を懸けずに守るかが大切なのは？」

「ああ…………」

セバスチャンは理解した。彼らが、従者というものを知らない事を。

「そうですね」

そして、冒険者は誰の従者でもないことを。

慣れないが、それが彼らの常識なのだ。従者が主の全てを優先するのが常識なのと、同じように。

「では、ワタクシは、万が一のために剣と楯を手放さないことにします……しかし、アールは」

「その剣でよからう……いや、その朽ちかけた剣がよからう」

ずつと若者と従者の会話を静かに聞いていたギルベルトが口を挟む。

「なぜです？」

若者の疑問に、ギルベルトはにやりと笑う。

「作戦だと思っていれば良い。そして、テオフィル」

「はいっ!？」

いきなり名前を呼ばれた少年が、驚いて顔を上げる。

「お主が、この作戦のキーマンだ!」

「え？」

急な指名に驚くテオフィルへ、ギルベルトはセバスチャンの背負い袋から取り出した物を放り投げる。あれは、ボースで買った物の中で、唯一使用用途が分からなかった物だ。軽いがかさ張って、持ち歩きたくなかったそれ。

「なに、これ？」

荷物を広げて、テオフィルが目を丸くした。

彼の手には、シンプルな作りの服があった。裾の広いそれは、シンプルだが、それ故に、間違いようがない。

女性用である。

「囃作戦だ」

「おとり……?」

「ああ」

いち早く察したユーリウスが、ため息をつく。セバスチャンも分かった。

生け贄は女性だ。

生け贄の代わりは、女性　せめて、女装をする必要がある。

セバスチャンは安堵の息を吐いた。ギルベルトに、女装癖があるのではないかと、思わなかった訳ではないのだ。

「セバス」

聡い主人は、安堵の表情を浮かべた従者を見逃さなかった。

「儂に、女装癖があるとでも思ったか？」

「いえ　いえ、そういう訳では……」

「一瞬、そうだったら面白いつて思ったぞ。なあ、セバスじーさん」
さらつと言った怖い物知らずは、当然ニコだ。

「はあ……いやっ！　そう思わなかった訳でもないですが、ワタクシは信じておりましたよ」

「何をだ……」

ギルベルトは苦笑する。

「はあ、すみません」

「いい。実はこれをお主に持たせた時、どう反応するか楽しみだったんだ……なのに、何も言わなかったからな、つまらなかった」

「……………」

楽しそうに笑う主人に、セバスチャンは言葉を失う。実は、女装癖をカミングアウトされた時、どう反応すべきか、結構悩んでいたのだ。

「じーさん、実は本気で悩んでいたな」

「お、そうなのか、セバス？」

「……答える気ありません」

「あ、あのう」

ギルベルトとニコが更にセバスチャンをからかおうと口を開きかけた時、遠慮がちな声が割って入った。

「僕も、そんな趣味は無いんですけど」

「うむ。仕事だ。着ろ」

「うつうつ……」

断る余地も無いギルベルトに、テオフィルはドレスを握り締めてなる。彼の背後には、楽しげにテオフィルを手招きしている兄と友人がいた。

「アールが着れば良いじゃん！」

「俺だと気持ち悪いだけじゃないか」

……確かに。この中で囀役ができるのは、まだ少年の域を抜け出していないテオフィルくらいだ。

「諦める、テオ」

「兄さん……」

可愛そうだが、テオフィルの女装は決定事項らしい。

「ん？」

「どうした、セバス？」

「い、いや。なんでもありません」

もし、アール達に出会わなかったら。テオフィルがいなかったら、だれがあのだレスを着る予定だったのだろうか？

……セバスチャンは、考えることを放棄することにした。

シイ山山頂付近には、いくつも白い岩でできた洞窟がある。噴火か何かの拍子に出来たのだろう。その一つに、アドルとシリイはいた。

「御山は？」

「静かだね」

アドルの問いに、はつきりとシリイは答える。

「勇者は？」

「もう少しで来るよ。ああ……良い格好だ」

アドルの声は楽しそうだ。

「やっぱり、囀が妥当だよ。生贄と、それを捧げる氏子達に化けて、懷まで入り込む。神の領域に入る事ができるのは、神が許したモノだけだ」

「人の区別がつかない神だったり、外見だけでしか判断できない神だったりすれば、だけどね」

そうだね、とアドルは同意する。

前者は特に珍しくない。人ではない神は、個を認識することが苦手だ。人が、同じ種類の動物の個を見分けることが難しいのと同じように。後者も少なくない。弱い神は、簡単に騙せる。

「そして、ここにいる生贄を求める『神様』は、それが有効」

どちらかと言えば、恐らく前者だろう。彼らは人を人以上に認識できない。

「……さて、どんなオチをつけてくれるか」

「満足そうだね」

シリイは苦笑した。

「全然予定通りに動いていないのに」

「まあね」

アドルは笑う。

自分の四倍近く生きた人の行動を、全て読み切れると考えるほど、アドルは傲慢ではない。アドルの予想した通り、彼は用意した道を半分以上無視して、ここに来た。一番大きな予想外は、やはり村に寄らずに直接山に登ったことだろう。

だが、それでいいと思っている。

だからこそ、おもしろいのだ。

制御不能な事態を傍観する楽しみ。うまく大筋から外れないように調整する楽しみは、素直に用意した道を歩く勇者からは、貰えないものだ。

「お手並み拝見」

「……呑気だな」

呆れた声が聞こえた。

ギルベルト達をこっそり守っていたエドとフェイスが、戻って来たのだ。これは、既に物語が、アドル達の手を離れたことを意味する。

事態は結末へ走るだけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4015w/>

勇者のための四重唱【蒼】第三曲「せかんど らいふ」

2011年10月8日03時21分発行